

日本におけるサービス・ラーニングの展開 (10)

——高校時代のボランティア活動経験類型 からみた大学生の態度や行動——

山田 一隆^{*1} 富川 拓^{*2} 大東 貢生^{*3}

Development of Service Learning in Japan Part 10 : What do volunteer experiences on high school days affect university students' attitudes and behavior?

Kazutaka YAMADA^{*1}, Taku TOMIKAWA^{*2}, Takao OTSUKA^{*3}

The paper illustrated university students' attitude and behavior through survey data of about 1,600 university students on Tokyo metropolitan and Kansai region. Our research question is whether volunteer experiences on their high school days affect university students' attitudes and behavior today. We demonstrated changes or differences of them—attitudes, social skills, priorities of volunteer activity in their daily life, images of volunteer activity, readiness for volunteer activity and learning outcomes of service learning—in their volunteer experience on service learning courses, curricular and extra-curricular, and no experience with using ANOVA and Chi-square test.

Findings were as follows. 1) 242 students (15.3%) experienced volunteer activity on their high school days. 2) Service learning courses or curricular experiences led to positive outcomes on prosocial attitudes or behavior about academic and community engagement. 3) Extra-curricular experiences led to awareness of issue of their community settings, positive image and high priority of volunteer activity. 4) Service learning courses and curricular experiences might be likely to raise reverse-productivity of readiness for volunteer activity and learning outcome of service learning.

With 3 reports in 2012, 2014 and 2015, Central Council for Education of Japan advocated active learning and mandated adoption of pedagogy such as service learning against secondary and higher education in order to foster active learners. But the Council warned that there is a possibility to increase reverse-productivity with over-stylizing pedagogy. We concluded that it is important for enhancing impact of service learning to apply balanced approaches with organizing learning settings and avoiding reverse-productivity and to support their volunteer activity on co-curricular by multi stakeholders.

キーワード：サービス・ラーニング，中等教育，高等教育，高大接続，奉仕

Key words : Service learning, Secondary education, Higher education, High school-university connection, Community service education

*1 岡山大学地域総合研究センター准教授

*2 聖泉大学人間学部准教授

*3 佛教大学社会学部准教授

1. はじめに

(1) 問題の所在

サービス・ラーニングとは、地域社会のニーズに応じた社会貢献活動に学習者が実際に参加・参画することで、地域社会に対する責任感等を養う教育方法である¹⁾。

先行研究において筆者らは、日本へのサービス・ラーニングの展開を7つに分類し、また実践事例をみることによって、課題として①学習の主体、サービスの提供側である「学生、大学」とサービスの受け手側である「地域住民、行政・福祉団体・NPO 団体などの外部セクター」との間で、サービス・ラーニングに対する共通理解が形成できていない点、②日本でのサービス・ラーニングには受け入れ側、つまり地域住民や外部セクターに対してサービスを提供するという意識がない、もしくは薄いという点の2点を指摘した²⁾。

さらに、筆者らは、東京都立高等学校の教科「奉仕」³⁾を事例とし、教科「奉仕」をサービス・ラーニングとしてみたときに、事前学習、体験活動、事後学習を経る中で、どのような方法やフィールドによって、それは助長されるのか、を、教科「奉仕」を受講した高校生に対するアンケート調査結果から検討した⁴⁾。

本稿では、東京都立高等学校において教科「奉仕」を履修した生徒が、大学進学後、ボランティア活動への志向性や態度特性に関して、他の学生とどのような差異を生じるのかを検討する前準備として、高校時代のボランティア活動経験の類型からみた態度の特性（態度特性）と行動の選好（行動選好）について検討することにした。

(2) わが国高等教育政策とサービス・ラーニング

2002 年に出された中教審答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」以降、生徒や学生をボランティア活動に従事「させる」ことが、それぞれの学齢・校種で制度的に取り組みられるようになった。初中等教育においては、「総合的な学習の時間」の導入に伴って、教室外活動を伴う体験学習が試行錯誤の中で続いている。東京都立高校では、2007 年度から教科「奉仕」が導入されてきた。

大学等高等教育機関においても、2005 年の中教審「将来像答申」⁵⁾や、2008 年の「学士課程答申」⁶⁾のなかで、「産業界をはじめ実社会の人材需要は「独創性」「即戦力」「基礎学力」等高度化・多様化の一途」をたどっている半面、「学生の知識・能力の低下や多様化を招いているのではないか」（「将来像答申」：16）との懸念を表明し、「学生を本気で学ばせるとともに、単位制度を実質化させる」（「学士課程答申」：15）ために、「学習の動機付けを図りつつ、双方向型の学習を展開するため、講義そのものを魅力あるものにする」とともに、体験活動を含む多様な教育方法を積極的に取り入れる」（「学士課程答申」：23）必要性を提唱している。

かくして、学生の「学び」への動機づけ、あるいは社会が要請する人材像としての即戦力性に応える人材育成の装置として、サービス・ラーニングが「ユニバーサル段階」を迎えた高等教育機関においても注目を集めることになる。

2012 年の中教審「質的転換答申」⁷⁾では、「学生に授業のための事前の準備（資料の下調べや読書、思考、学生同士のディスカッション、他の専門家等とのコミュニケーション等）、授業の受講

(教員の直接指導、その中での教員と学生、学生同士の対話や意思疎通)や事後の展開(授業内容の確認や理解の深化のための探究等)を促す教育上の工夫、インターンシップやサービス・ラーニング、留学体験といった教室外学修プログラム等の提供が必要である」(「質的転換答申」: 9-10)ことを指摘し、PBL (Project/Problem-Based Learning) の手法として、改めてサービス・ラーニングへの期待が表明されている。2014 年の中教審「高大接続答申」⁸⁾では、大学だけでなく、高等学校においても、アクティブ・ラーニング「飛躍的充実」が強調され、それに呼応して、改めて、大学においても「質的に転換」することを求めている(「高大接続答申」: 10)。

2. 調査概要

本調査は、2013 年から 2014 年にかけて首都圏の 8 大学、関西圏の 3 大学において、各大学に在籍する教員の協力を得て、おもに低回生配当の授業で、学生に質問紙を配布し、回答し、回収する方法で実施した。有効回答数は、1,619 (首都圏の 8 大学 1,004、関西圏の 3 大学 615) である。

調査内容は、被験者の性別(設問番号 F 01)、生まれ年(同 F 02)、出身高校(所在地(同 F 03)、設置主体(同 F 04))、奉仕的科目の受講の有無(同 F 05)、現在の態度特性(同 F 06)、生活諸側面の優先順位(同 F 07)、ボランティア活動に対するイメージ(同 Q 01)、ボランティア活動に対する意見や態度(同 Q 02)、ボランティア活動のきっかけや情報源(同 Q 03)、関心のある活動分野(同 Q 04)、東日本大震災に関連したボランティア活動への参加の経験と意向(同 Q 05)、大学入学以前のボランティア活動経験(時期、形態、頻度、活動分野、内容)(同 Q 06-Q 07)、大学入学後のボランティア活動経験(時期、形態、頻度、活動分野、内容)(同 Q 08-Q 09)、ボランティア活動と学び(同 Q 10)、に関するものである。

これらの調査項目のうち、F 06 の一部、F 07、Q 01、Q 03、Q 06、Q 07、Q 08、Q 09、Q 10 の一部は、筆者のひとり(山田)がかかわった「立命館大学生のボランティア活動に関する実態調査」(2005 年度、2007 年度)の項目と比較可能となるように設計されている。また、F 06、Q 02、Q 04、Q 05、Q 10 は、大東貢生ら(2014)で紹介されている東京都立高校での教科「奉仕」受講に関する生徒アンケート調査の項目と比較可能となるようにも設計されている。

F 06、Q 10 は、立命館大学が採択を受けた文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)「地域活性化ボランティアの深化と発展」(2005-08 年度)の一環で設置された「ボランティア・サービスラーニング研究会」によって開発され、立命館大学での調査に用いられた項目⁹⁾に加え、菊池章夫(1988)が提案する「社会的スキル(KiSS-18)」のうちから、本調査の趣旨に沿う 7 項目を追加している。さらに、既述の大東貢生ら(2014)から本調査に至るまでに、独自の項目が 1 つから 4 つ追加され、F 06 は全 20 項目、Q 10 は全 23 項目となっている。

Q 02 は、Reeb et al. (1998) の調査項目を参照し、筆者らの先行研究を踏まえ、活動のなかで自己の能力を発揮できるかというソーシャルスキルに関する項目群(6 項目)、ボランティア活動の可能性に関する項目群(3 項目)、今後のボランティア活動への可能性の項目の 10 項目を考案したものである¹⁰⁾。

なお、本調査の実施に際し、対象者となる学生たちには、本調査への回答は任意であること、集計・分析の公表にあたっては、個人が特定される方法では行わないこと、回答済み調査票の提出をもって、これらの点に同意したとみなされることを、質問紙のかがみ文および質問紙の配布時に口

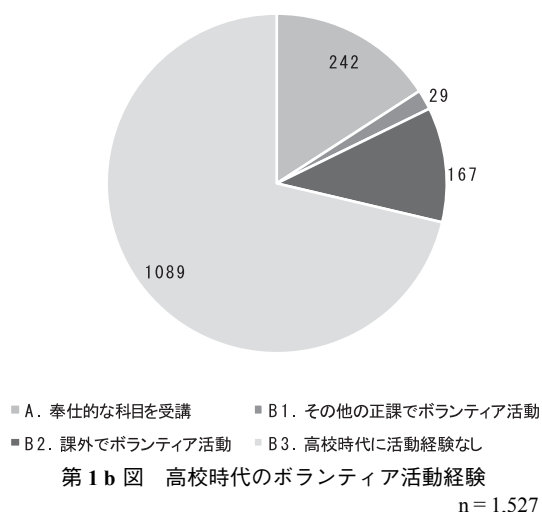
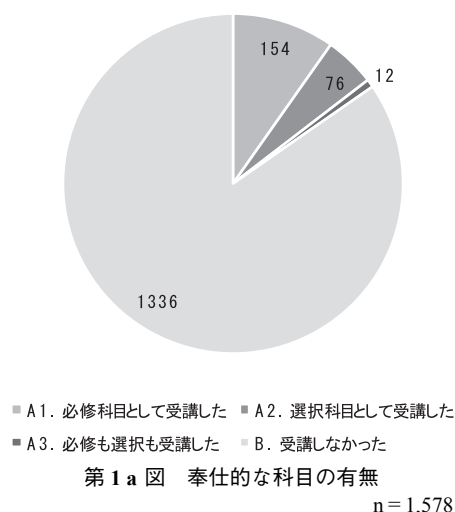
頭でも伝え、協力を求めた。

3. 結果概要

(1) 「奉仕的な科目」の受講状況

本調査では、「あなたは高校時代に、教科「奉仕」など、社会貢献、奉仕活動などを行うことが中心となった教科、科目を受講しましたか。」との問い（設問番号 F 05）を、「必修科目として受講した」「選択科目として受講した」「必修も選択も受講した」「受講しなかった」の4群から選択させた。第1a図をみると、「……受講した」の3群を合わせると、15.3%（242/1,578）が、高校時代に何らかの奉仕活動を行うことが中心となった科目（以下、「奉仕的な科目」という）を受講していることが明らかとなった。

奉仕的な科目の受講の有無以外のボランティア活動経験も考えてみる。本調査では、大学入学以前のボランティア活動の経験の有無とその時期¹¹⁾を問うている（設問番号 Q 06-Q 07）。「受講しなかった」群を、「高校生時代」の活動経験の有無で2群にわけ、さらにその活動形態¹²⁾について「授業の一環で」とその他の課外活動にわけ、「その他の正課でボランティア活動」、「課外でボランティア活動」をそれぞれ経験、「高校時代に活動経験なし」の3群に分類し、奉仕的な科目を受講した者とあわせ、互いに背反な4つの類型を生成した。各群の分布は、第1b図に示した。「その他の課外でボランティア活動」は、1.9%（29/1,527）と全体に占める割合がかなり小さいが、本稿は、奉仕的な科目の受講経験をめぐる研究の前準備に位置付けるものであるので、丸めずに1つの群としておく。「課外でボランティア活動」は、10.9%（167/1,527）で、「奉仕的な科目を受講」をあわせて、28.7%（438/1,527）が、高校時代に何らかの形でボランティア活動を経験している。「高校時代に活動経験なし」は、71.3%（1,089/1,527）であった。筆者のうちのひとり（山田）が関わった2007年度「立命館大学生のボランティア活動に関する実態調査」の結果を参照すると、高校時代にボランティア活動を経験した立命館大学生は、「正課で」が2%、「課外で」が10%である。調査対象、方法とも異なるため単純に比較することはできないが、この間に、高校において正課でボランティア活動の導入が進んできたということかもしれない。他方で、課外でのボランテ



ィア活動経験はあまり変化がみられず、全体として、高校生にとって、ボランティア活動がより身近になったとまでは言い切れない。

次項以降の検討では、奉仕的な科目の受講の有無の2群での比較とあわせ、受講経験がない学生を細分した「奉仕的な科目を受講」、「その他の正課でボランティア活動」、「課外でボランティア活動」、「高校時代に活動経験なし」の4群での比較も行い、活動経験類型の差異が大学生となった現在の態度特性と行動選好にどのような差異をもたらしているのかを考えてみることにする。

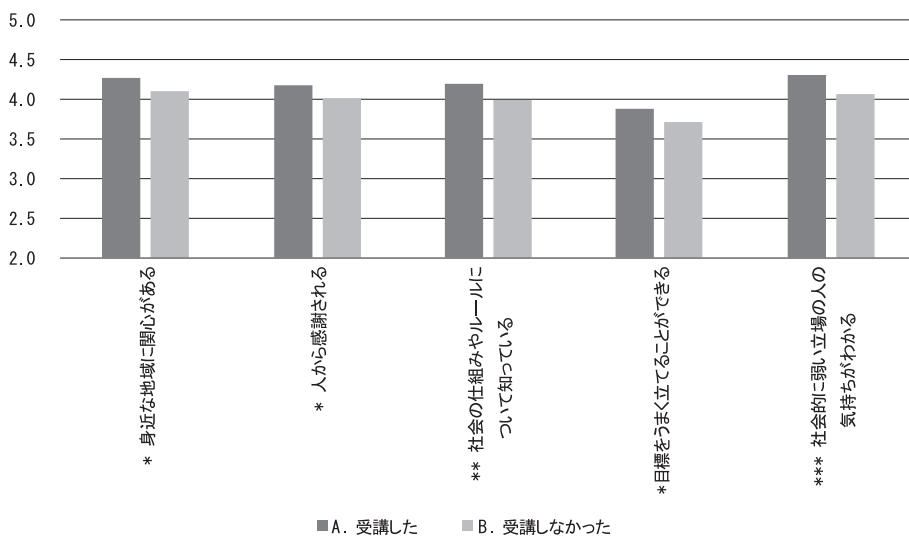
(2) 態度特性、社会的スキルとの関係

本調査では、回答者の現在の態度特性や選好、社会的スキルについて「今のあなたの考えや気持ちをお答えください。」との問い（設問番号F06）を設けている。全20項目¹³⁾について、「非常にそうだ」、「かなりそうだ」、「ややそうだ」、「やや違う」、「かなり違う」、「非常に違う」の6件法¹⁴⁾で問うている。「奉仕的な科目の受講の有無」の2群間で、平均の差の検定を行った。

その結果、第2図のように、0.1%水準で、「社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる」($t=3.329$, $df=334.336$, $p=.0009$)が、1%水準で、「社会の仕組みやルールについて知っている」($t=3.205$, $df=342.932$, $p=.002$)が、5%水準で、「身近な地域に関心がある」($t=2.302$, $df=323.649$, $p=.022$)、「人から感謝される」($t=2.581$, $df=334.640$, $p=.012$)、「目標をうまく立てることができる」($t=2.367$, $df=319.097$, $p=.013$)が、それぞれ「受講した」群のほうが「そう思う」傾向にあることが明らかとなった。身近な地域や社会の仕組みや矛盾に対するまなざし、計画力や実行力を育む契機として、奉仕的な科目の意義が示唆される。

次に、「奉仕的な科目を受講」、「その他の正課でボランティア活動」、「課外でボランティア活動」、「活動経験なし」の4群で、上述の20項目について、一元配置分散分析を行った。

その結果、第3図のように、0.1%水準で、「社会の仕組みやルールについて知っている」($F(3,1516)=5.538$, $p=.0008$)、「社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる」($F(3,1519)=5.809$, p

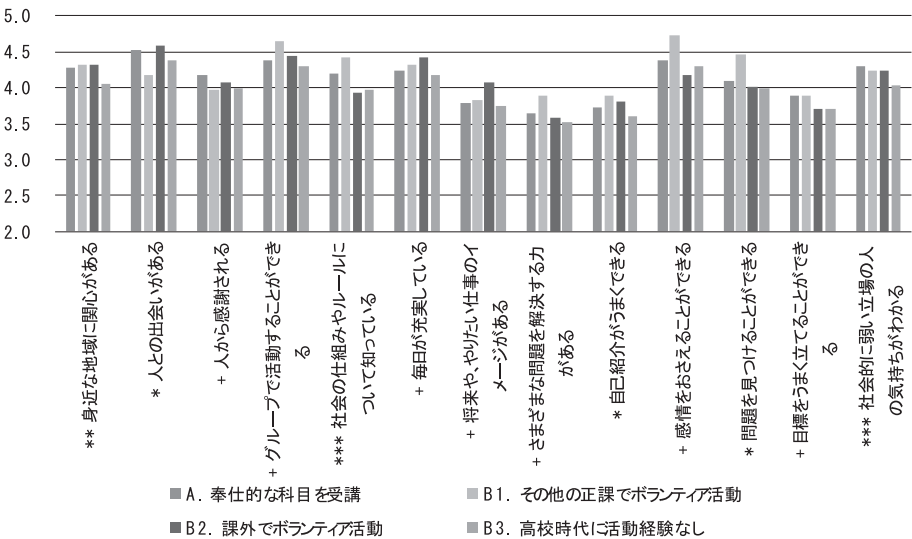


第2図 奉仕的な科目の受講と態度特性、社会的スキル

*** : $p<.001$, ** : $p<.01$, * : $p<.05$, + : $p<.1$

=.0006), 1% 水準で, 「身近な地域に関心がある」 ($F(3,1520)=5.340, p=.001$), 5% 水準で, 「人との出会いがある」 ($F(3,1522)=2.688, p=.045$), 「自己紹介がうまくできる」 ($F(3,1521)=2.888, p=.034$), 「問題を見つけることができる」 ($F(3,1517)=2.767, p=.041$), 10% 水準で, 「人から感謝される」 ($F(3,1505)=2.504, p=.058$), 「グループで活動することができる」 ($F(3,1521)=2.099, p=.099$), 「毎日が充実している」 ($F(3,1519)=2.447, p=.062$), 「将来や, やりたい仕事のイメージがある」 ($F(3,1520)=2.525, p=.056$), 「さまざまな問題を解決する力がある」 ($F(3,1518)=2.362, p=.070$), 「感情をおさえることができる」 ($F(3,1518)=2.389, p=.067$), 「目標をうまく立てることができる」 ($F(3,1516)=2.524, p=.056$) で, それぞれ有意差があることが明らかとなった。また, Tukey 法による多重比較の結果は, 第3図の付表のように得られた。

「社会の仕組みやルールについて知っている」, 「感情をおさえることができる」, 「問題を見つけることができる」といった態度特性や社会的スキルについては, 「奉仕的な科目を受講」, 「その他の正課でボランティア活動」の群のほうが, そうでない群よりも「そう思う」傾向が有意に多い。「身近な地域に関心がある」, 「社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる」は, 「奉仕的な科目を受講」, 「課外でのボランティア活動」の群のほうが, そうでない群よりも「そう思う」傾向が有意に多い。「人から感謝される」「目標をうまく立てることができる」は, 「奉仕的な科目を受講」のほ



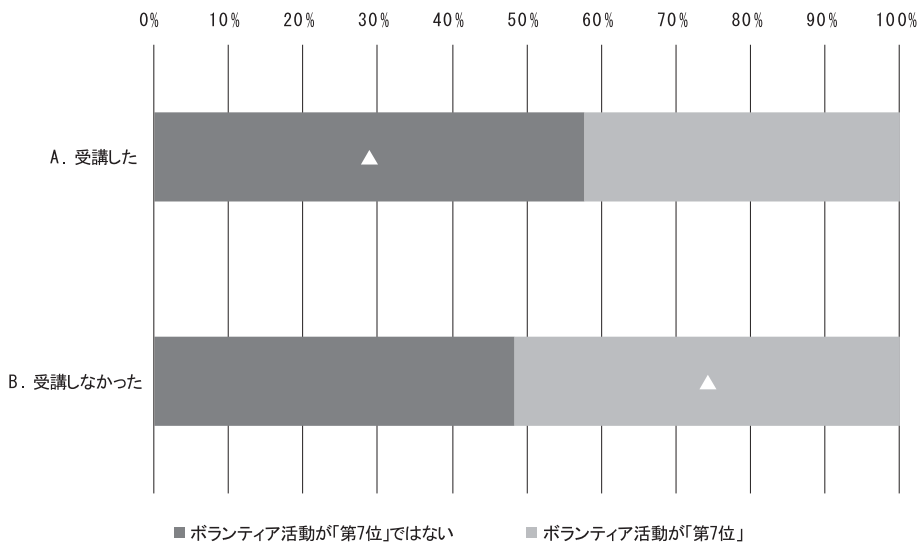
身近な地域に関心がある**	A, B2 > B3
人から感謝される+	A > B3
社会の仕組みやルールについて知っている***	A, B1 > B2, B3
毎日が充実している+	B2 > B3
将来や、やりたい仕事のイメージがある+	B2 > B3
自己紹介がうまくできる*	B2 > B3
感情をおさえることができる+	B1 > B2
問題を見つけることができる*	B1 > B2, B3
目標をうまく立てることができる+	A > B3
社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる***	A, B2 > B3

第3図 高校時代のボランティア活動経験と態度特性, 社会的スキル

*** : $p<.001$, ** : $p<.01$, * : $p<.05$, + : $p<.1$

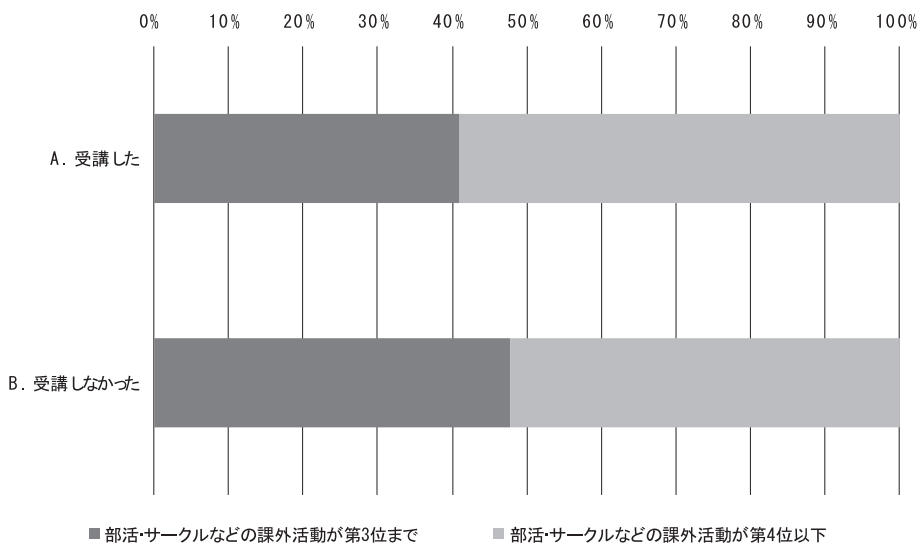
うが、「活動経験なし」の群よりも、「そう思う」傾向が有意に多い。「毎日が充実している」、「将来や、やりたい仕事のイメージがある」、「自己紹介がうまくできる」は、「課外でボランティア活動」の群が、「活動経験なし」の群よりも、「そう思う」傾向が有意に多い。

おしなべて、正課、課外を問わず、何らかの形で、ボランティア活動を経験しているほうが、能動的だったり、向社会的だったりする傾向がみられる。正課と課外との経験類型の差をみると、社会や学校のなかでの規範に対して適応的な態度特性やスキルの高まりが、正課のほうが自覚されやすいと考えられる。ボランティア活動そのものがその中心にある奉仕的な科目や課外でのボランティア活動からは、身近な地域や社会的弱者など、具体的な社会問題や生活課題への気づきの高まり



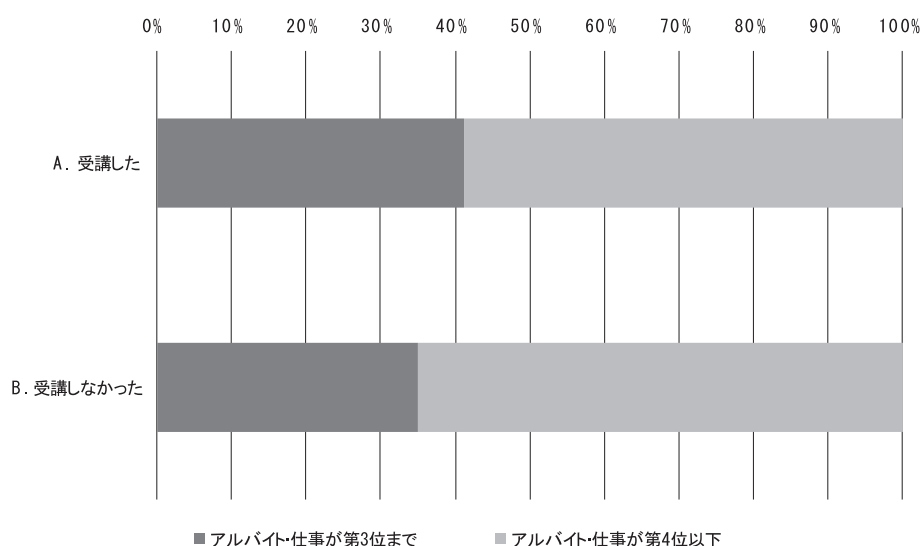
第4a図 奉仕的な科目の受講と学生生活の諸側面（ボランティア活動）

p = .008



第4b図 奉仕的な科目の受講と学生生活の諸側面（部活・サークルなどの課外活動）

p = .055



第4c図 奉仕的な科目の受講と学生生活の諸側面（アルバイト・仕事）

$p = .065$

が自覚されていると考えられる。さらに、課外での活動経験からは、学生生活の充実や外向性の高まりが自覚されている。

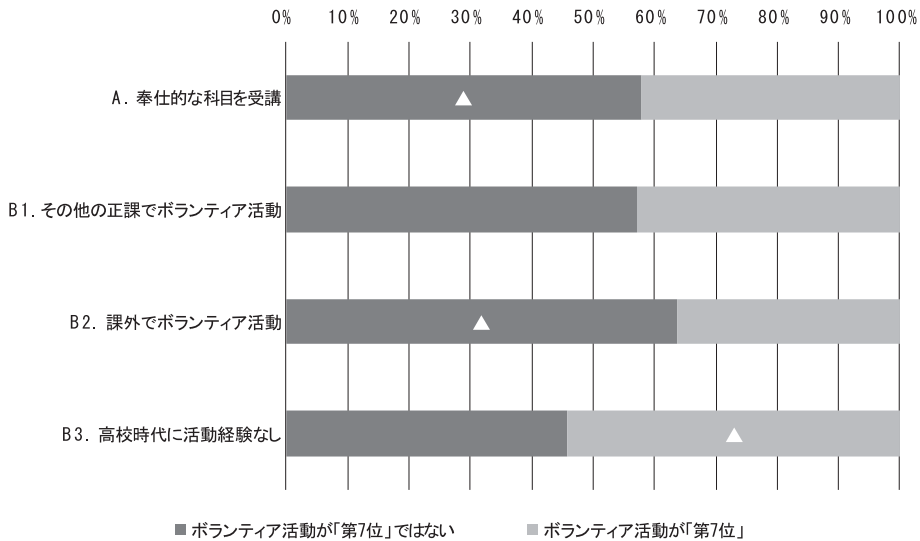
(3) 学生生活の諸側面との関係

本調査では、「あなたが大学生生活を送るうえでの優先順位が高いものから順に、1～7の番号をつけてください。」との問い（設問番号 F 07）を設けている。7つの生活諸側面¹⁵⁾について、優先順位づけをさせるものである。各側面について、1位から7位までの分布を得たものを度数がおおむね半数ずつになる順位で2群に丸め、「奉仕的な科目の受講の有無」の2群とのクロス集計を行い、 χ^2 検定、残差分析を行った。

その結果、第4図のように、1%水準で、「ボランティア活動」（分割点は「6位」「7位」。 $\chi^2(1) = 7.056, p = .008$ ）が、10%水準で、「部活・サークルなどの課外活動」（同「3位」「4位」。 $\chi^2(1) = 3.694, p = .055$ ）、「アルバイト・仕事」（同「3位」「4位」。 $\chi^2(1) = 3.399, p = .065$ ）が、それぞれ有意差がみられた。残差分析の結果、「ボランティア活動」については、5%水準で有意に多いセルが確認された。

「ボランティア活動」は、「受講した」群のほうが、優先順位が高い群の割合が有意に多いことが明らかとなった。また、有意差は確認できなかったが、「アルバイト・仕事」は、「受講した」群のほうが、優先順位が高い群の割合が、「部活・サークルなどの課外活動」は、「受講した」群のほうが、優先順位が低い群の割合が、それぞれ多いことが明らかとなった。学業以外の学生生活の過ごし方のなかで、同じ世代や価値観をもつ者との交流よりも、社会とのかかわりを求める傾向にいざなわれることが、奉仕的な科目の効果として示唆される。

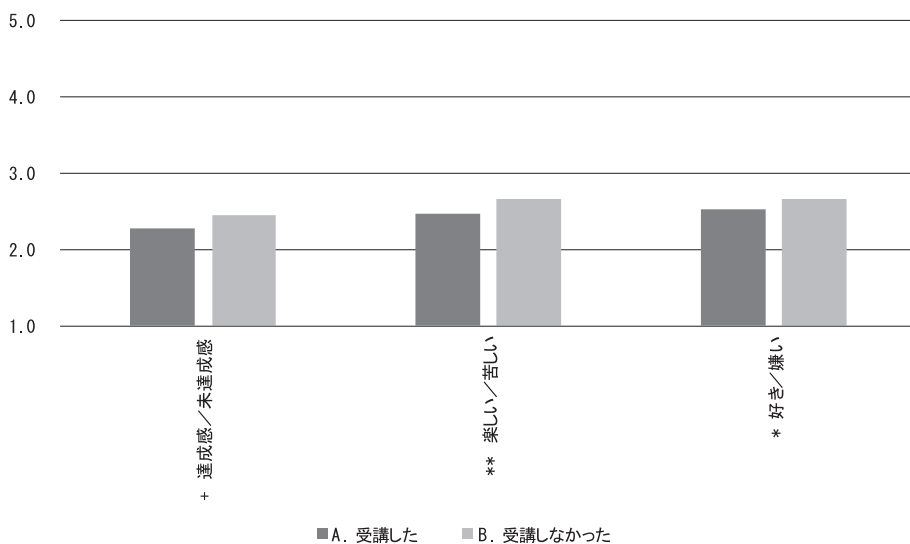
次に、「奉仕的な科目を受講」、「その他の正課でボランティア活動」、「課外でボランティア活動」、「活動経験なし」の4群で、上述の7側面について、クロス集計を行い、 χ^2 検定、残差分析を行った。



第5図 高校時代のボランティア活動経験と学生生活の諸側面（ボランティア活動）
 ▲：残差分析により、5%水準で有意に多いとされたセル $p < .001$

その結果、第5図のように、0.1%水準で、「ボランティア活動」($\chi^2(3) = 25.869, p < .001$)に有意差がみられた。残差分析の結果、5%水準で有意に多いセルが確認された。

「奉仕的な科目を受講」と「課外でボランティア活動」のそれぞれ群で、優先順位が高い群の割合が、「高校時代に活動経験なし」の群で、優先順位の低い群の割合が、それぞれ有意に多くなっている。また、有意差は確認できなかったが、「その他正課でボランティア活動」の群も、「活動経験なし」の群に比べると、優先順位が高い群の割合が多くなっている。正課、課外を問わず、高校時代にボランティア活動を経験していることが、学生生活のなかでも、ボランティア活動に取り組もうとする動機につながりやすいのだとみられる。逆に、高校時代に活動経験がないと、大学入学



第6図 奉仕的な科目の受講とボランティアに対するイメージ
 ***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, +: $p < .1$

後にきっかけづくりや動機づけの機会¹⁶⁾が得られなければ、学生生活のなかに、ボランティア活動を位置づけることが難しくなるということだとみられる。

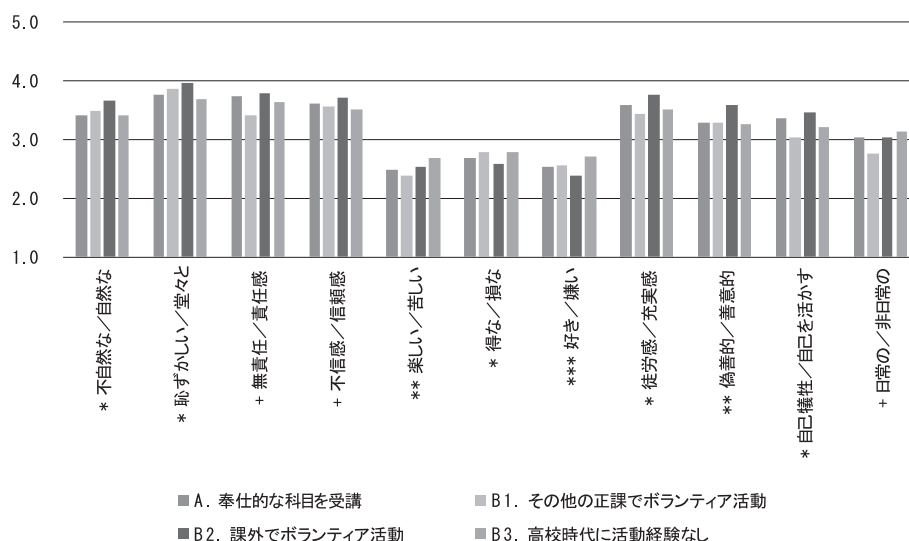
(4) ボランティアに対するイメージとの関係

本調査では、「ボランティア活動の現状についてのイメージについてお答えください」との問いを設けている。全 18 組の対義語の対¹⁷⁾を両端とする 5 件法で問うている（設問番号 Q 01）。「奉仕的な科目の受講の有無」の 2 群間で、平均の差の検定を行った。

その結果、第 6 図のように、1% 水準で、「楽しい／苦しい」（ $t=2.814$, $df=312.536$, $p=.003$ ）が、5% 水準で、「好き／嫌い」（ $t=2.175$, $df=322.608$, $p=.025$ ）が、10% 水準で、「達成感／未達成感」（ $t=1.906$, $df=321.315$, $p=.052$ ）が、それぞれ有意差がみられた。「受講した」群のほうがそれぞれ「楽しい」「好き」「達成感」のほうにイメージをもつ傾向にあることが明らかとなった。ボランティア活動に対する親近感や好感が高まることが、奉仕的な科目の効果として示唆される。

次に、「奉仕的な科目を受講」、「その他の正課でボランティア活動」、「課外でボランティア活動」、「活動経験なし」の 4 群で、上述の 18 組の対義語の対について、一元配置分散分析を行った。

その結果、第 7 図のように、0.1% 水準で、「好き／嫌い」（ $F(3,1512)=7.792$, $p<.001$ ），1% 水準で、「楽しい／苦しい」（ $F(3,1511)=4.883$, $p=.002$ ），「偽善的／善意的」（ $F(3,1513)=4.585$, $p=.003$ ），5% 水準で、「不自然な／自然な」（ $F(3,1515)=3.514$, $p=.015$ ），「恥ずかしい／堂々と」



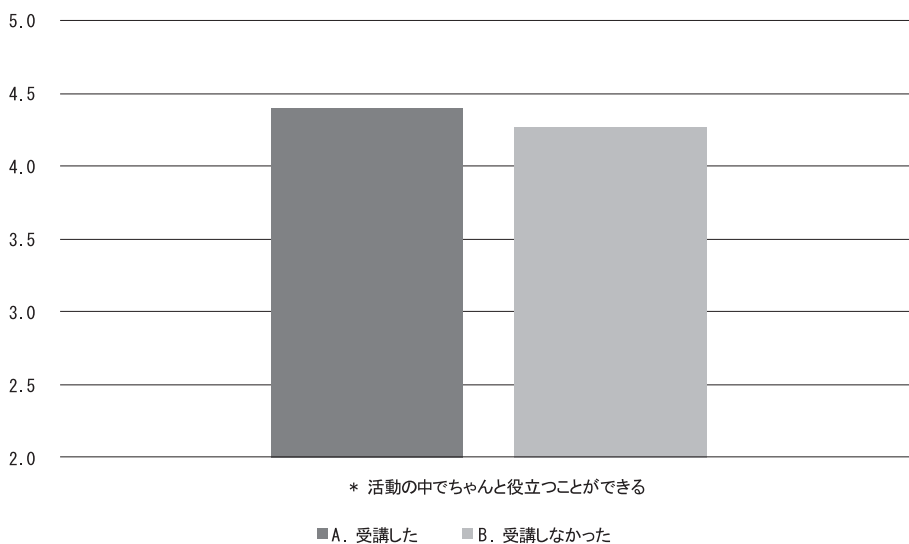
不自然な／自然な *	B2 > A, B3
恥ずかしい／堂々と *	B2 > B3
楽しい／苦しい **	B3 > A
得な／損な *	B3 > B2
好き／嫌い ***	B3 > A, B2
徒労感／充実感 *	B2 > B3
偽善的／善意的 **	B2 > A, B3
自己犠牲／自己を活かす *	B2 > B3

第 7 図 高校時代のボランティア活動経験とボランティアに対するイメージ

*** : $p<.001$, ** : $p<.01$, * : $p<.05$, + : $p<.1$

($F(3,1515)=3.764, p=.010$), 「得な／損な」($F(3,1518)=2.811, p=.038$), 「徒労感／充実感」($F(3,1514)=3.724, p=.011$), 「自己犠牲／自己を活かす」($F(3,1513)=3.758, p=.011$), 10% 水準で, 「無責任／責任感」($F(3,1513)=2.303, p=.075$), 「不信感／信頼感」($F(3,1506)=2.152, p=.092$), 「日常の／非日常の」($F(3,1517)=2.312, p=.074$) で, それぞれ有意差があることが明らかとなった。また, Tukey 法による多重比較の結果は, 第 7 図の付表のように得られた。

これをみると, 「課外でボランティア活動」の群が, 「奉仕的な科目を受講」や「活動経験なし」の群に比べて, 積極的なイメージをいただいていることがわかる。「自然」で「堂々と」していて, 「善意」からの「自己を活か」せる「充実感」があり, 「好き」でお「得な」活動, という具合である。「奉仕的な科目を受講」の群は, 「活動経験なし」の群に比べて, 「楽し」くて「好き」なものだとのイメージをいただいているものの, 「課外でボランティア活動」の群と比べると, 「不自然で」「偽善的」なものであるとのイメージもいただいている。これは, 奉仕的な科目の困難や葛藤の一端が表れているとも考えられる。ボランティア活動を正課に取り入れることは, 「制御可能な」学習環境をあらかじめ「用意」する必要がある。また, 採点や評価という行為がつかまい, そのなかで, 学生, 教職員, 受け入れ先などのステークホルダーが「自然に」ふるまうことは, 高度な相互承認と信頼が醸成されていることが前提となろう。しかし, 現実には, 科目として展開するうえで, 限られた期間に, 可能な限りのタスクを「消化」していくことに目を奪われがちとなる。そのため, ボランティア活動が本来もっている自発性を, 生徒から剥奪することにつながりかねない。イリイチのいう「逆生産性」問題¹⁸⁾を敷衍すれば, ボランティア活動を取り入れた授業を作り込めば作り込むほど, 自発性, 公共性, 無償性, 先駆性といった, 本来ボランティアが備えているはずの性質やそれを身につけようとする教育目的から, かえって, 生徒たちを遠ざけてしまうことになる, ということである。



第 8 図 奉仕的な科目の受講とボランティア活動に対するレジネス

*** : $p<.001$, ** : $p<.01$, * : $p<.05$, + : $p<.1$

(5) ボランティアに対するレジネスとの関係

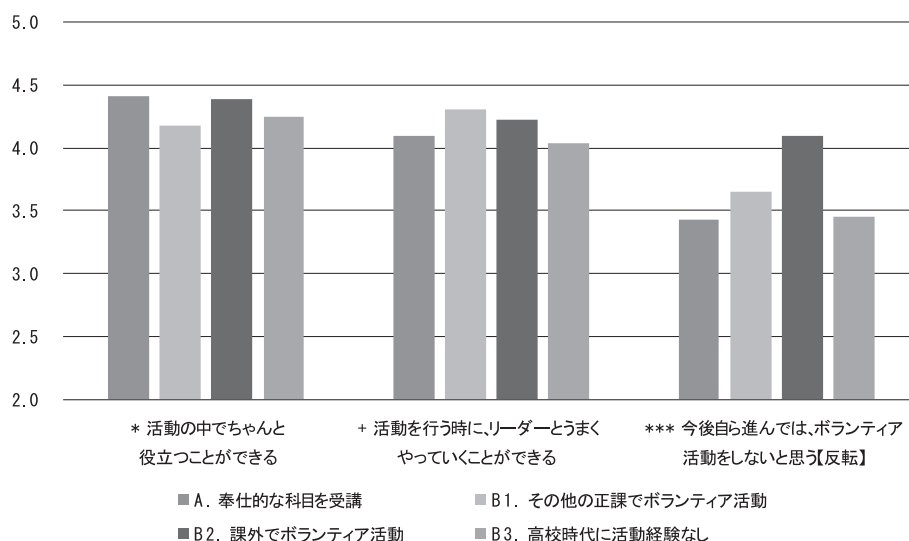
本調査では、「あなたがボランティア活動にのぞむ場合の、あなた自身の意見や態度についてお答えください。」との問い（設問番号 Q 02）を設けている。全 10 項目¹⁹⁾について、「非常にそうだ」、「かなりそうだ」、「ややそうだ」、「やや違う」、「かなり違う」、「非常に違う」の 6 件法²⁰⁾で問うている。「奉仕的な科目の受講の有無」の 2 群間で、平均の差の検定を行った。

その結果、第 8 図のように、5% 水準で、「活動の中でちゃんと役立つことができる」($t=2.194$, $df=325.694$, $p=.026$) が、有意差がみられた。「受講した」群のほうが「そう思う」傾向にあることが明らかとなった。実際の活動経験を踏んでいることで、次に何らかのボランティア活動に従事する際にも、自分が果たしうる役割についての予見が備わっていることが、奉仕的な科目の効果として示唆される。

次に、「奉仕的な科目を受講」、「その他の正課でボランティア活動」、「課外でボランティア活動」、「活動経験なし」の 4 群で、上述の 10 項目について、一元配置分散分析を行った。

その結果、第 9 図のように、0.1% 水準で、「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う【反転】」($F(3,1517)=13.216$, $p<.001$)、5% 水準で、「活動の中でちゃんと役立つことができる」($F(3,1518)=2.936$, $p=.032$)、10% 水準で、「活動を行う時に、リーダーとうまくやることができる」($F(3,1514)=2.536$, $p=.055$)、で、それぞれ有意差があることが明らかとなった。また、Tukey 法による多重比較の結果は、第 9 図の付表のように得られた。

これをみると、「課外でボランティア活動」の群は、「活動経験なし」の群に比べて、「活動を行う時に、リーダーとうまくやることができる」が「非常にそうだ」と考える傾向がある。グループやチームで活動する際の行動様式が備わっていると認識しているということだろう。また、



活動の中でちゃんと役立つことができる *	A > B3
活動を行う時に、リーダーとうまくやることができる +	B2 > B3
今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う【反転】***	B2 > A, B3

第 9 図 高校時代のボランティア活動経験とボランティア活動に対するレジネス

*** : $p<.001$, ** : $p<.01$, * : $p<.05$, + : $p<.1$

「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う【反転】」では、他の群に比べて「非常に違う」と考える傾向がある。主体的に取り組んだ課外での経験から、多くの学びを得たという体験が新たな動機づけにつながっているのだろう。

他方で、「奉仕的な科目の受講」の群は、「活動経験なし」の群に比べて、「活動の中でちゃんと役に立つことができる」は「非常にそうだ」と考えられている。奉仕的な科目で経験したボランティア活動を通して、活動のなかでの行動様式を学んだことに裏打ちされた認識であろう。また、「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う【反転】」では、「活動経験なし」と有意差がみられず、「課外でボランティア活動」の群との間で有意差がみられた。これもまた、前項で指摘した「逆生産性」問題を反映しているのかもしれない。

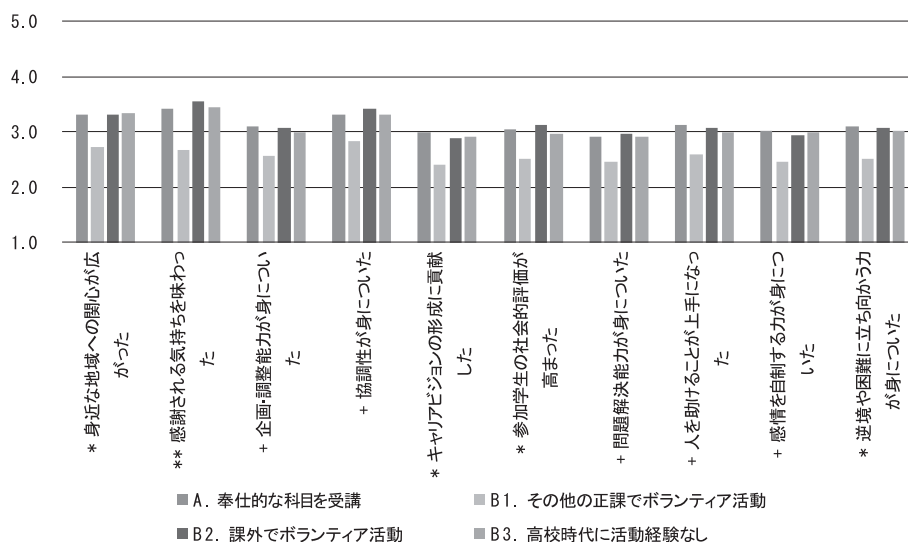
(6) ボランティア活動を通した学び

本調査では、ボランティア活動を経験したことがある者に限定して、「あなたが、これまでのボランティア活動で得た成果や、活動してよかったことについてお答えください。」との問い（設問番号 Q 10）を設けている。全 23 項目²¹⁾について、「とてもそう思う」、「そう思う」、「どちらともいえない」、「そうは思わない」、「まったくそうは思わない」の 5 件法で問うている。「奉仕的な科目を受講」、「その他の正課でボランティア活動」、「課外でボランティア活動」、「活動経験なし」の 4 群で、一元配置分散分析を行った。この場合、「活動経験なし」の群には、中学校時代以前ないし大学入学後にボランティア活動を経験した者が該当する。

その結果、第 10 図のように、1% 水準で、「感謝される気持ちを味わった」($F(3,764)=3.976, p=.008$), 5% 水準で、「身近な地域への関心が広がった」($F(3,763)=2.642, p=.048$), 「キャリアビジョンの形成に貢献した」($F(3,761)=2.745, p=.042$), 「参加学生の社会的評価が高まった」($F(3,761)=3.227, p=.022$), 「逆境や困難に立ち向かう力が身についた」($F(3,762)=2.677, p=.046$), 10% 水準で、「企画・調整能力が身についた」($F(3,762)=2.318, p=.074$), 「協調性が身についた」($F(3,761)=2.093, p=.100$), 「問題解決能力が身についた」($F(3,760)=2.200, p=.087$), 「人を助けることが上手になった」($F(3,758)=2.471, p=.061$), 「感情を自制する力が身についた」($F(3,758)=2.484, p=.060$) で、それぞれ有意差があることが明らかとなった。また、Tukey 法による多重比較の結果は、第 10 図の付表のように得られた。

これらを見ると、おしなべて、「その他の正課でボランティア活動」の群の学びが低いといえる。高校時代に奉仕的な科目以外の正課を通して経験したボランティア活動からは、これらの学びを得ることが難しかったとみられている。ただちに判断できるものではないが、奉仕的な科目に比べて、単元内容の理解やその目標への到達に力点が置かれ、地域社会への責任感を育てるといったボランティア活動の意味づけが十分ではなかった、教育目的や学習目標と活動との関連性に対する生徒たちの理解が不十分なままであった、などが想起される。ボランティア活動を正課に取り入れる意義が、生徒と教員の間で共有される過程が重要であるということへの示唆があるものとみられる。

また、「奉仕的な科目を受講」と「課外でボランティア活動」の 2 群と、「高校時代に活動経験なし」の群との間には、有意差をみいだされなかった。これは、「高校時代に活動経験なし」の群には、中学校以前や大学入学後にボランティア活動に取り組んだ学生の学びが表れているのであり、



身近な地域への関心が広がった*	A, B2, B3 > B1
感謝される気持ちを味わった**	A, B2, B3 > B1
企画・調整能力が身についた+	A, B2 > B1
協調性が身についた*	B2 > B1
キャリアビジョンの形成に貢献した*	A, B2, B3 > B1
参加学生の社会的評価が高まった*	A, B2, B3 > B1
問題解決能力が身についた+	A, B2, B3 > B1
人を助けることが上手になった+	A, B2 > B1
感情を自制する力が身についた+	A, B2, B3 > B1
逆境や困難に立ち向かう力が身についた*	A, B2, B3 > B1

第10図 高校時代のボランティア活動経験とボランティア活動を通した学び

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, +: $p < .1$

中学校以前や大学入学後と同様に、高等学校においても、奉仕的な科目を受講し、課外でのボランティア活動に取り組む意義は同等であることを示唆しているとみられる。ただ、高等学校ならではの学びについては、さらに考察を深める必要がある。

4. まとめに代えて

本稿では、教科「奉仕」を履修した生徒が、大学進学後、ボランティア活動への志向性や態度特性に関して、他の学生とどのような差異を生じるのかを検討する前準備として、高校時代のボランティア活動経験の類型からみた態度特性と行動選好について検討した。

その結果、まず、東京都立高校出身者に限らず、調査対象となった大学生の15.3%が奉仕的な科目を受講していることが明らかとなった。地域差や設置主体の別など、実施状況との対照を通して、奉仕的な科目の広がりや深まりを把握する必要があるだろう。

奉仕的な科目の受講と学生の態度特性や社会的スキルとの関係では、身近な地域や社会の仕組みや矛盾に対するまなざし、計画力や実行力を育む契機として、奉仕的な科目の意義が示唆された。また、正課、課外を問わず、何らかの形で、ボランティア活動を体験しているほうが、能動的で向社会的な傾向がみられる。正課では、社会や学校のなかでの規範に対して適応的な態度特性やスキ

ルの高まりが、課外では、身近な地域や社会的弱者など、具体的な社会問題や生活課題への気づきの高まりが、それぞれ自覚されている。

学業以外の学生生活の過ごし方との関係では、同じ世代や価値観をもつ者との交流よりも、社会とのかかわりを求める傾向にいざなわれることが、奉仕的な科目の効果として示唆された。正課、課外を問わず、高校時代にボランティア活動を経験していることが、学生生活のなかでも、ボランティア活動に取り組もうとする動機につながりやすく、活動経験がないと、学生生活のなかに、ボランティア活動を位置づけるためには、大学でのきっかけづくりや動機づけの機会が重要になってくる。

ボランティアに対するイメージとの関係では、親近感や好感が高まるものの、正課での活動経験群のうちには、科目としての学習環境の過度な作り込みや、それにともなうボランティアが本来備えているはずの性質からの疎外といった「逆生産性」問題の存在を認識させる結果がみられた。

ボランティアに対するレジネスとの関係では、自分が果たしうる役割についての予見が備わっていることが、奉仕的な科目の効果として示唆された。また、正課での活動経験では、「逆生産性」問題の存在を認識させる反応もみられた。課外での活動経験は、集団での協働や協調的な行動への対応ができるとの認識を助長することが示唆される結果がみられた。

ボランティア活動を通した学びとの関係では、正課での活動経験群のうちには、相対的に学びが低いと認識されるところがあった。検証が必要ではあるが、ボランティア活動を正課に取り入れる意義が、生徒と教員の間で共有される過程が重要であることを示唆するものであろう。また、中学校以前や大学入学後と同様に、高等学校においても、奉仕的な科目を受講し、課外でのボランティア活動に取り組む意義は同等であることを示唆する結果を得たが、高等学校ならではの学びについては、さらに考察を深める必要がある。

高校時代に何らかの形でボランティア活動経験をもつ群は、約3割と少数派ではあるが、大学入学後に初めてボランティア活動やサービス・ラーニングを体験する学生にとって、ロールモデルを提示する可能性をもつ。

「自発的ではない活動はその後の自発的な活動に結び付きにくい」ことが指摘されている(柴田和子ら(2004)、古川秀夫ら(2004)、大東貢生ら(2004))が、東京都立高等学校の教科「奉仕」の受講に関しては、入念な事後学習が、生徒たちの学びの実感に影響を与えていることが観察され、生徒たちも、ボランティア活動を社会変革の醸成や社会的スキルの向上に結び付けて考えていることが推察されている(大東貢生ら(2012, 2014))。

これらの知見を本稿の知見に重ね合わせれば、奉仕的な科目の受講を契機として、ボランティア活動への親近感や身近な地域の問題への関心や態度が培われたとしても、継続的な活動機会と入念な省察の機会が、大学入学後にも必要であるということが浮かび上がる。

2015年の教育課程企画特別部会「論点整理」²²⁾では、2030年の社会を展望し、次の学習指導要領改訂の視点は、「子供たちが「何を知っているか」だけではなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」ということであり、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力や人間性など情意・態度等に関わるものの全てを、いかに総合的に育んでいくかということ」(「論点整理」: 16)であるとし、「特に高等学校において、義務教育までの成果を確実につなぎ、一人一人に育まれた力を更に発展・向上させる」(「論点整理」: 19)方法

として、アクティブ・ラーニングが唱道されている。

校種の隔てなく、境目のないアクティブ・ラーニングの導入が要請されている。本稿の冒頭でもふれたように、今日、大学教育改革のなかでも、授業の「アクティブ・ラーニング化」が強く推奨され、サービス・ラーニングをはじめとする教育手法が普及している。国際的に唱道される「21世紀型市民」の育成のための方略とも重なりあう²³⁾。

そのなかで、サービス・ラーニングや、問題基盤型学習（PBL： Problem-Based Learning）やプロジェクト型学習（PBL： Project-Based Learning）などへの期待は、既有知識や講義で学んだ（Learn）知識を再構成し（Unlearn）、問題発見や問題解決に挑む力をはぐくみ、省察を経て、いま一度、学び直す（Relearn）ことを循環的に促すという点にあるといえる。そこに異論はないが、本調査の結果でも垣間見られた「逆生産性」問題や「論点整理」が指摘する「特定の学習や指導の「型」に拘泥する事態」（「論点整理」：17）は、ボランティア学習のしなやかで豊饒な学びを、硬直化させてしまうおそれがある。こうした葛藤を抱えながら、高等学校や大学の教育現場での実践は、いまこの瞬間にも重ねられている。これらを継続して追いかけることが、本研究の今後の課題であり、サービス・ラーニングにかかわるステークホルダーの学びと成長、評価と改善に関する論議の基礎資料を提示したということを、ひとまず本稿の意義と位置付けたい。

付記

本報告は、科学研究費助成事業「中等教育におけるサービス・ラーニングの影響に関する研究」（基盤研究（c）、課題番号：22530584、研究代表者：大東貢生、研究期間：2010-12年度）、「教育困難校におけるサービス・ラーニングの影響に関する研究」（基盤研究（c）、課題番号：15 K 03892、研究代表者：大東貢生、研究期間：2015-17年度）、および、龍谷大学国際社会文化研究所 2014 年度研究助成（研究代表者：古川秀夫）の成果の一部である。

また、本稿の一部は、2015 年 11 月 15 日に開催された、日本福祉教育・ボランティア学習学会第 21 回やまぐち大会において、大東貢生・山田一隆・富川拓・柴田和子・古川秀夫（2015）：「日本におけるサービス・ラーニングの展開（9）——高校時代のボランティア活動経験類型からみた大学生の態度特性と行動選好——」としてポスター報告した。

注

- 1) 富川拓・柴田和子・大東貢生・古川秀夫（2008）。
- 2) 前掲、富川拓ら（2008）。
- 3) 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課（2006）。
- 4) 大東貢生・富川拓・山田一隆・古川秀夫・柴田和子（2012）。
- 5) 中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像（答申）」2005 年 1 月 28 日。
- 6) 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」2008 年 12 月 24 日。
- 7) 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」2012 年 8 月 28 日。
- 8) 中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」2014 年 12 月 22 日。
- 9) 山田一隆・井上泰夫（2009 a, 2009 b）。
- 10) 前掲、大東貢生ら（2014）。
- 11) 選択肢は、「小学校時代」、「中学校時代」、「高校生時代」、「その他」であり、複数の時期に活動を経験している場合には、もっとも力を注いだものを一つ選んでいる。
- 12) 選択肢は、「授業の一環として」、「課外活動（ボランティアサークル以外）として」、「学校のボランティアサークルの活動として」、「学校外のボランティアグループ・団体・施設の活動として」、「友人・仲間どうしのグループ活動として」、「どこにも所属せず（一人で）」、「こども会、町内会・自治会の活動とし

て」、「その他」である。

- 13) 「身近な地域に関心がある」、「人との出会いがある」、「人から感謝される」、「自分に自信がない」、「ものごとを計画的に進められる」、「グループで活動することができる」、「社会の仕組みやルールについて知っている」、「毎日が充実している」、「自分の考えや思いをうまく表すことができる」、「将来や、やりたい仕事のイメージがある」、「この大学の学生の評判はよいと思う」、「さまざまな問題を解決する力がある」、「人間関係をうまく持てる」、「会話がとぎれてしまう」、「人を助けることがうまくできる」、「自己紹介がうまくできる」、「感情をおさえることができる」、「問題を見つけることができる」、「目標をうまく立てることができる」、「社会的に弱い立場の人の気持ちがわかる」の全 20 項目。
- 14) 本調査では、「非常にそうだ」に「1」、「非常に違う」に「6」を配当した調査票を作成したが、他との比較などを考慮し、本稿では、「非常にそうだ」が「6」点、「非常に違う」が「1」点となるようにデータを変換している。
- 15) 「大学の学業」「ボランティア活動」「部活・サークルなどの課外活動」「アルバイト・仕事」「友人や恋人との交流」「趣味・習い事」「家族との交流や世話」の 7 側面。
- 16) 山田一隆・井上泰夫 (2009 a) のなかでは、学生のボランティア活動から得る学びをめぐる大学ボランティアセンターの役割を論じるなかで、学生のボランティア経験の熟度との関係から適切なきっかけづくりについての検討を行っている。
- 17) 「不自然な／自然な」、「恥ずかしい／堂々と」、「達成感／未達成感」、「無責任／責任感」、「不信感／信頼感」、「連帯感／孤独感」、「楽しい／苦しい」、「得な／損な」、「好き／嫌い」、「敷居の高い／気軽にできる」、「報酬のある／無報酬な」、「立派／立派でない」、「感動的な／無味乾燥とした」、「徒労感／充実感」、「偽善的／善意的」、「一方的な／お互い様の」、「自己犠牲／自己を活かす」、「日常の／非日常の」の 18 組。調査票では、各対の左側の語に「1」を、右側の語に「5」を、それぞれ配当した。
- 18) 「一定の強度を上回って成長するとき、不可避免的に、その利点を享受しうる人々よりも多数の人々を、その道具が作られた目的から遠ざけてしまう」(イリイチ (2005) : 164)。
- 19) 「活動の中でちゃんと役立つことができる」、「自分の興味や能力にあった活動を見つけることができる」、「活動を通じて、正しい社会の実現に役立つことができる」、「活動を通じて、地域社会をよくすることができる」、「活動を行っても、社会はそのままである」、「活動を行う時に、リーダーとうまくやっていくことができる」、「活動を行うことによって、平等な社会をつくりだせる」、「活動を通じて、自分の問題を解決することができる」、「活動に加わることで、がんばっている人を手助けできる」、「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う」の全 10 項目。
- 20) 本調査では、「非常にそうだ」に「1」、「非常に違う」に「6」を配当した調査票を作成したが、他との比較などを考慮し、本稿では、「非常にそうだ」が「6」点、「非常に違う」が「1」点となるようにデータを変換している。ただし、「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う【反転】」については、データを変換していない。
- 21) 「身近な地域への関心が広がった」、「感謝される気持ちを味わった」、「多様な出会いを得た」、「楽しさを味わった」、「企画・調整能力が身についた」、「協調性が身についた」、「社会への理解が広がった」、「自信を身につけた」、「自己表現能力が高まった」、「キャリアビジョンの形成に貢献した」、「参加学生の社会的評価が高まった」、「問題解決能力が身についた」、「人間関係をうまく持てるようになった」、「会話が途切れなくなった」、「人を助けることが上手になった」、「初対面時の自己紹介がうまくなった」、「感情を自制する力が身についた」、「問題を発見する能力が高まった」、「目標をうまく設定できるようになった」、「社会的弱者を理解する力が身についた」、「専攻している学問分野に対する関心が高まった」、「逆境や困難に立ち向かう力が身についた」、「もっと勉強したいと思った」の全 23 項目。
- 22) 中央教育審議会教育課程企画特別部会「教育課程企画特別部会における論点整理について (報告)」2015 年 8 月 26 日。
- 23) 山田一隆 (2016) は、わが国でサービス・ラーニングに託されつつある学習成果が、国際的に唱道される「21 世紀型スキル」と呼応し、その背景には、経済社会のグローバル化と、民主主義や市民学習の地平を強化することとの緊張関係があることを、米国の高等教育政策を参照し、整理している。

参考文献・サイト

- Reeb, R. N., Katsuyama, R. M., Sammon, J. A., Yoder, D. S.. 1998. The Community Service Self-Efficacy Scale : Evidence of Reliability, Construct Validity, and Pragmatic Utility. *Michigan Journal of Community Service Learning*.

ing, Volume 5, Issue 1, 48-57.

- イバン・イリイチ [著], デイヴィッド・ケイリー [編], 高島和哉 [訳], 2005, 『生きる意味「システム」「責任」「生命」への批判』, 藤原書店, 461 p.
- 大東貢生・柴田和子・湯川宗紀, 2004, 「ボランティア・イメージと活動経験の連関性」。龍谷大学国際社会文化研究所, 『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』 6, 146-156。
- 大東貢生・富川拓・古川秀夫・山田一隆, 2014, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開 (6) ——部活動連携型の奉仕体験活動が及ぼす影響——」。龍谷大学国際社会文化研究所, 『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』 16, 145-156。
- 大東貢生・富川拓・柴田和子・古川秀夫・山田一隆, 2010, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開 III —ボランティアやサービス・ラーニングによる他者理解に向けて—」。佛教大学社会学研究会, 『佛大社会学』 34, 46-52。
- 大東貢生・富川拓・山田一隆・古川秀夫・柴田和子, 2012, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開 (6) ——教科「奉仕」受講生に対するアンケート調査から——」。日本福祉教育・ボランティア学習学会第 18 回いばらき大会ポスター報告。
- 大東貢生・古川秀夫・柴田和子・大山治彦・富川拓, 2009, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開 II —東京都立 A 高等学校を事例として—」。佛教大学社会学研究会, 『佛大社会学』 33, 47-52。
- 菊池章夫, 1988, 『思いやりを科学する』, 川島書店, 212 p.
- 菊池章夫・長濱加那子, 2008, 「KiSS-18 の妥当性についての一資料」。尚絅学院大学, 『尚絅学院大学紀要』, 56, 261-264。
- 柴田和子・大東貢生・大山治彦・古川秀夫, 2004, 「ボランティア活動の動機における自発性と外発性」。龍谷大学国際社会文化研究所, 『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』 6, 119-131。
- 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課, 2006, 『「奉仕」カリキュラム開発委員会報告書～奉仕体験活動の必修化に向けて～』, 東京都教育委員会。
- 富川拓・柴田和子・大東貢生・古川秀夫, 2008, 「サービス・ラーニングの研究と実践をめぐる諸課題」。佛教大学社会学研究会, 『佛大社会学』 32, 9-18。
- 富川拓・大山治彦・柴田和子・古川秀夫・大東貢生, 2009, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開 I ～東京都立高校における必修科目「奉仕」の創設について～」。佛教大学社会学研究会, 『佛大社会学』 33, 41-46。
- 古川秀夫・大東貢生・田中滋・福田菊, 2004, 「ボランティア団体のニーズと大学生の意識との間の乖離」。龍谷大学国際社会文化研究所, 『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』 6, 132-145。
- 山田一隆, 2016, 「米国高等教育におけるサービスラーニング——市民学習と学習成果をめぐる政策と評価枠組の概観——」。立命館大学政策科学会, 『政策科学』 23-3, 113-136。
- 山田一隆・井上泰夫, 2009 a, 「ボランティア活動を通じた学生の「学び」のイメージ—2007 年度立命館大学学生意識調査を事例として」。立命館大学人間科学研究所, 『立命館人間科学研究』 19, 59-75。
- 山田一隆・井上泰夫, 2009 b, 「ボランティア活動から学生は何を学ぶのか——2007 年度立命館大学学生調査を事例として」。桜井政成・津止正敏 [編], 『ボランティア教育の新地平』, ミネルヴァ書房, 21-50。